

〔書評と紹介〕

佐藤信・五味文彦編 『土地と在地の世界を探る―古代から中世へ―』

中野 栄夫

本書は一九九五年十一月一二日に開催された史学会のシンポジウム「土地と在地の世界を探る―古代から中世へ―」の報告に基づいた論文の他に、その討論をふまえた寄稿論文、および司会をつとめた佐藤・五味両氏の論文からなる。

まずは、本書の目次を示しておこう。

はしがき

佐藤信・五味文彦

第Ⅰ部 古代の在地世界へ

郡符木簡にみる在地支配の様相

佐藤 信

古代の土地売買と在地社会

三谷芳幸

荘所の形態と在地支配をめぐる諸問題

小口雅史

第Ⅱ部 在地の世界から

古代集落と在地社会

松村恵司

現地調査からみた在地の世界

鈴木景二

―近江国薬師寺領豊浦荘・興福寺領鯉江荘

―国東半島の荘園の成立と開発

飯沼賢司

第Ⅲ部 在地世界の変貌

神領興行法と在地構造の転換

井上 聡

名手・粉河の山と水

―水利秩序はなぜ形成されなかったのか

服部英雄

鎌倉後期・在地社会の変質

五味文彦

（巻末付載）初期荘園関係文献目録・荘園関係文献目録

以下、目次の順に内容を紹介しつつ若干の指摘を行い、書評に代えたい。

佐藤氏の論文は各地の地方官衙遺跡などから出土した「郡符木簡」の内容を手がかりとして、古代の在地世界における支配の具体的様相を探ろうとしたもので、諸国の郡内において郡司が里（郷）長・郡雑人・里正ないし里（郷）内の民衆に対して下される召喚などの命令が、広範かつ日常的に口頭ではなく文書木簡によって伝達されていたという様相、つまり在地世界への律令文書主義の浸透を指摘している。また召喚状木簡は単に召喚の機能を果たすだけでなく、召喚地まで携行されて通交証（過所）としても機能し、あるいは召喚時の参向者チェックまで使用されたのではないかと推測している。

三谷論文は古代の土地売買について考察する。日本では賃租と永代売買とが区別されずともに「売買」と呼ばれたが、筆者は日本古代の「売買」は、本主に返還されることを前提として土地の収益権を譲渡する行為だと定義する。そして賃租と永代売買との相違は相伝性にあるという。そして古代の永代売買が未成熟でもともと限られた階層でしか行われなかったこと、八世紀後半に一般百姓に普及し始めてからも依然として首長制的土地支配に強く制約されていたこと、九世紀の

在地では律令制的土地支配にしばらくは売買が展開されていたこと、などを指摘する。「本土」とは何なのであろうかという疑問が湧いた。

小口論文は従来の初期荘園の文献史学的研究をふまえ、考古学的成果を取り込んで初期荘園について論じようとするもので、とくに荘所についてのをしほって考察し、さらに初期荘園の経営や、開拓村落を形成したか否かにも言及する。最近各地方で荘所と見られる遺構が報告されているが、そういった成果を総轄的に取り上げたもので、試論の域を脱していないともいえるが、在地の実態に正面からアプローチしようとするものであり、制度的分析にとどまらない本書のタイトルにふさわしい内容といえよう。筆者が指摘するように、文献史料にみられる初期荘園は大半が東大寺関係であるので、こういった考古学的成果の援用はきわめて有効であろう。

松村論文は遺跡・遺物の分析から古代人の実態に迫ろうとする。群馬県子持村黒井峯遺跡は榛名山二ツ岳の噴火によって瞬時に埋没した集落遺跡で、被災時の状況をよくとどめている。この遺跡からは平地遺跡が発見され、それは古墳時代の集落観を一変させたことでも注目されているが、その分析から古代の「戸」との関係を見る。また六世紀中ごろの集落では屋敷地を所有する家族単位に動産所有がなされ、それが小家族単位で管理されていること、有力家族の成長が認められることなどを指摘し、銚子・鉄器の出土の分析から、集落の序列などを考える。

鈴木論文では近江国の豊浦荘と鯉江荘との二つの荘園を取り上げ、水がかりなどにも留意をはらいつつ、景観と信仰ないし意識を考える。

その方法はどちらかというと民俗学的方法に近いが、もう一歩踏み込んだ指摘が欲しいように感じられた。

飯沼論文は国東半島の荘園の開発について述べる。筆者は開発における用水とくに井堰の重要性を指摘する。現地調査にそくした本書のタイトルにふさわしい内容である。ただ挿図がコピーしたものを利用したらしく不明瞭であるのは残念である。註の人名・署名に旧字を使うほどの気遣いがあるのなら、むしろ挿図にエネルギーを注いで欲しかった。また史料の出典表記が、その本のない環境で学ぶ者を突き放しているように感じられた。

井上論文はいわゆる神領興行法の再検討を行う。神領興行法については、その施行が御家人の不満を招いて幕府討滅を導いたという説と、建武・室町両政権に至ってもこの法は機能し続けたという説とが対立しているが、筆者は後者の立場に立ち、またこの法の主たる課題は、複雑に入り込んだ神官・御家人の権利関係を領域分割・一元化の推進を通じて解消しようというものであったと主張し、この法が室町期に全国的に成立してゆく「寺社本所一円領・武家領体制」の先駆をなしたと評価する。またこの法が宇佐宮造営対策の一環として発令されたものと断じている。

服部論文は水無川（名手川）の用水をめぐる粉河寺領丹生屋村と高野山領名手荘との争いをみる。この水論は著名なものであるが、筆者は現地調査をもとに分水施設である料の現地比定を試みる。またこの水論両者の統合によって解決されたと結んでいる。本書のタイトルにふさわしい内容である。

五味論文は徒然草と絵巻を素材に鎌倉後期のその時期の生活文化の変化の諸様相を指摘し、さらにその変化を底辺で支えた村落の動きを探る。平易な文体で分かりやすくこの時代の社会の変化を述べている。

以上、内容を紹介しつつ、若干のコメントを付した。本書に収録された各論文に共通しているのは、従来の研究がどちらかというと文献史料を基軸としていたのに対して、木簡・遺物・遺構・慣行・絵巻といった歴史史料を積極的に取り込んでことである。そしてそれらは試論の域を脱していないように見えるものもあるが、所期の目的は果たしているようである。そして各論文は個別研究としてはこれからの研究に寄与するところ大であるというよう。

たしかに本書のもととなったシンポジウムの案内を見たとき、新鮮なタイトルのように感じた。そして各論文は一応の目的を果たしているといえよう。しかし、このような一書となったものの全体を通観してみると、果たしてこの書で編者は何を訴えたかったのか、という疑問が湧いてきた。新たな視座で史資料を吟味しつつ現地に密着した個別研究であれば、それで「在地世界」を論じたことになるのであろうか。本書を読んで、自分でもよく使う「在地」という語の意味が正直いつてわからなくなってしまった。シンポジウムであれば、いくつかの報告に関連性がなかったにしても、コーディネーターやフロアーの発言によって全体が何となくまとまるといったことがありえよう。しかし、本書の全体を通してみたとき個別報告の集成という感じを受けた。少なくとも編者の総論的意図を示すべきではなかったであろうか。また三部に分けてあるが、それぞれのねらいを感じ取れなかった。

以上の指摘はもとより、個別の研究はそれぞれ手堅い手法で論じられて新たな提言も見られ、非常に得るところがあった、という前提のもとでの注文である。本書をもとに新たな視点が開拓されることを期待しよう。

(山川出版社 A5判 二八八一九頁)

一九九六年一〇月刊 定価五四〇〇円)

(なかの・ひでお 法政大学教授)